郷土室だより

第 11 号

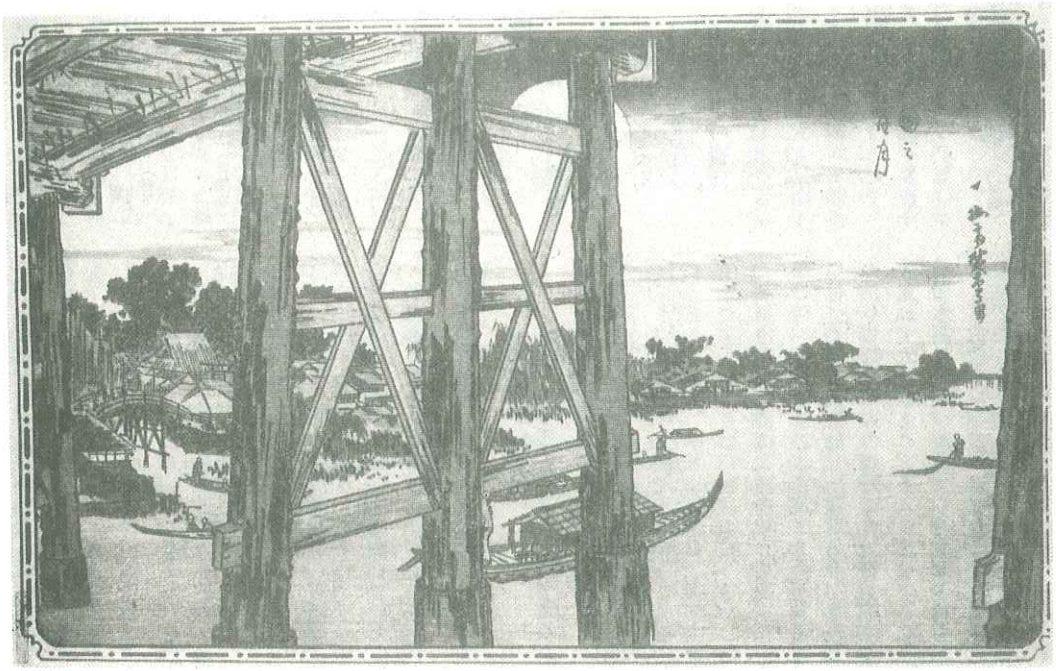
昭和50年11月25日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電 話 543－9025



初代広重画「東都名所両国の宵月」

中央区名所名物句集 三

安藤菊二輯

両国の橋かゝりければ

皆出て橋をいたゞく霜路哉　芭蕉（発句集拾遺）

両国橋上に水音すごし

物おもふ舟の早さや郭公　轍士（其便）

両国橋上吟

千人が手を欄干や橋すゞみ　晋子（其便）

両国橋上

暁のつくばにたつや寒念佛　其角（続虚栗）

寒念佛橋をこゆれば跡からも　其角（五元集）

舟興

一両が花火間もなき光哉　其角（五元集）

人声を風の吹とる花火かな　涼菟（皮籠摺）

扇的花火たてたる扈従かな　其角（皮籠摺）

橋杭の股に見得たる花火かな　沾州（皮籠摺）

虹吹くや両国橋のくれ遅き　三字（観随筆）

橋の名にふるやむさしとしもつふさ　近之（洗濯物）

生酔に棒突き二人橋納涼　素外

両国橋

おもしろや何丸か丸船すゞみ　冠鵬（鹿子）

江戸両国逍遙

漁舟みえて吹なりはるの風　大江丸（俳諧悔）

両国橋上

空に投る礫の玉や夏の月　哲阿弥（句集）

両国夜講　三国志

あつき夜や孔明風を祈れども　蓼太（一夏百句）

二州橋

五月雨や傘をわたせる橋はしら　蓼太（一夏百句）

中洲の花は、はせを庵の垣越より空に映じて、玉屋〳〵と誉のゝしる声と共に聞く侍るも、いつしか葉月の頃は打しめりていと暗く、虫の音ばかりになりぬるも哀也、されば世の人の名を求、利を求るも又是に似たり

両国納涼

橋涼し雪の高根を吹来る歟　沾峨（吐屑庵）

両国の橋に人咲くすゞみかな　冬英（玉池雑藻）

両国は寝ぬにあけなむすゞみ時　仙鳧（玉池雑藻）

両国橋遠望

時鳥小舟もつうい〳〵哉　一茶（一茶句帖）

両国や小さい舟の青簾　一茶

両国や冷水店の店の宴　一茶

両国橋（文化四年十二月廿七日）

としの暮亀はいつ迄釣さるゝ　一茶（一茶旅日記）

両国橋上看紫曙

春立や見古したれど筑波山　一茶（文化句帖）

明るより暮るまで「両国橋の上には往来が鏈一すぢの絶る間なし」と諺にいふもさる事にて

十倍す春の来る夜の人通り　寥松（八朶園句集）

「両国橋、此橋は丁酉の年（。明暦三年）江戸大火事の時、下町のものども風下をのがれんと、浅草の見付へと、車長持総じて諸道具を引きたるゆへ、道つかへて数多の人の焼死にたるを、不便と思召し、若重ねて大火事ありとも人の損せざるやうとて、下総国本所へ、江戸浅草より百余間の橋をかけさせらるゝ。武蔵下総両国へ掛りたる橋なるゆへに、両国橋と名付るなり。此橋のうへより眺望心ことばもおよばれず。

〈割注〉此以前は船遊山花火も、三つまたにてたてたれども、此橋わたされてより、此橋の下に屋形舟をかけてあそぶ。」（戸田茂睡、『紫田一本』巻下）

両国菜市

うつり香の市をかけるや橋の霜　諷可（鹿子）

「『飛鳥川』に、両国広小路に、昔朝々菜の市出る。然る処、近年は広小路へ一円野菜持出し、其外塩もの類塩出しをして色々出る。又料理に、直に遣ふ様に切割をして出すも有、見物事也。とある外、他に見る所が無い。」（木村拾三氏『註解江戸名物鹿子』）

ばせを膏薬

阿蘭陀のはさみつかひややれ（破）芭蕉　栄峨（鹿子）

「両国米沢町にある店で、同店の商標によれば「南蛮流早直し金瘡膏、一貝六十四銅、半貝二十二銅本家他家無類、両国橋米沢町一丁目長谷川花蕉製、右膏薬南蛮流の家伝にて、一切のできもの、きりきず、いたみを留め治する事妙也。元禄年中初、元文二巳年改、此方よりせりうり一切出し不申候」とある。店は冠髪香の五十嵐兵庫と相対し、壁間に芭蕉を画いてあったといふ。」（木村拾三氏『註解江戸名物鹿子』）

大木伝四郎

白雨や大木のかげの一凌ぎ　重山（鹿子）

「大木伝四郎は、両国米沢町にある歯薬と歯磨き

を業としていた老舗である。両国から浜町に通ずる河岸に、幕府の矢の蔵があった。その後取払われて空地となった。即ち吉川町が町家となったのは、元禄十一年頃、更に米沢町一帯が町家として発展したのは、その翌年十二年である。大木伝四郎の祖先がここに落付いたのは、恐らく万治の初めであろう。その後五臓円を発売して好評を博す。今は神田鍛冶町三丁目に移り、十二代の現当主に至るまで、都下有数の薬店として繁昌している。」（木村捨三氏『註解江戸名物鹿子』）

幾世餅

声いくよ餅へ春込川衡　長川（鹿子）

二洲橋のほとりに庵を結し頃、山居せば、上田三反、味噌八斗、小者ひとりに水のよい所と、ある禅師の狂歌をおもひ出て、そこに商家の名のおかしければ

玉苗の門田持けりいくよ餅　蓼太（句集）

「幾世餅は両国西広小路吉川町にあった餡ころ餅で、小松屋喜兵衛という。そのはじめ鉄砲町に住しが、元禄十七年ここに出て餅を商ひ、その妻もと新吉原の娼婦であったが、その名を取り、いくよ餅と名付けた。夫よりその名を模して、諸所に、、、店現はれ江戸の名物となった。天保の頃は若松屋といへるが、小松屋と本家争ひをして、葛藤常に絶えなかったといふ。」（木村捨三氏『註解江戸名物鹿子』）

両国新柳町

春風やみなあたらしき家つくり　五休

半までひらいてわすれ扇かな　必貫

（東京繁華一覧）

この両句は、明治二年刊『東京繁華一覧』によった。この書、新柳町に註して、次のごとくに記している。「〇西両国河岸通に町家造立御免あり。柳橋につづくが故、新柳町の名をたまはりけり。さらぬだに柳橋のほとりは酒楼船宿多くして、東京に目立たる繁昌なるに、今又此新開の土地相応の業家軒を競ひ、家居はいづれも清潔にして、月花の頃、花火雪見の客を招くの儲あり、歌妓（げいしゃ）の盛なるは人のしる所なれば、記すに及ばず。」

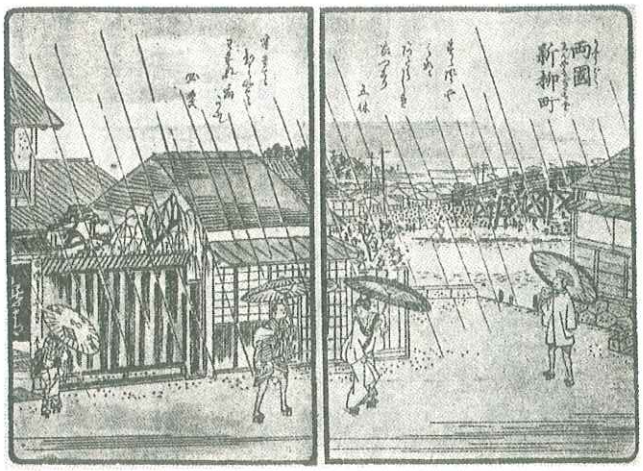
薬研堀不動奉納

山ほどに動ぬ時や秋の水　哲阿弥（句集）

薬研堀不動起立の初端について、町奉行の在職一八年におよんだ、名奉行根津鎮衛（しづもり）の随筆『耳袋』一の巻に記すところがある。お奉行が記し留めているのが珍らしい。少々長いけれども、参考までに掲げておく。

菜研堀不動起立の事

右不動は、元来本所辺御旗本の方に、お首ばかり古来より待ち伝え、作仏の由なりしが、たびたび宜しからざるの事のみあり。或いは夢枕にて見えしゆえ、主人愁えけれども、捨てんも心苦しく、出入りの修験に海宝院といえるありしゆえ、右の者へ「右みぐしを遣すべき間、建立致し助成になすべきや」とありてあたえければ、かの海宝院は気根よき人にて、日々右みぐしを育い、江戸中建立の奉加をしけるが、元文の初め、今の不動のありける所、茗荷屋庄左衛門といえる茶屋にて、右の入り角は九尺の店ありて久しく明店を、海宝院、庄左衛門へ対談して一ヶ月二十四匁ずつの家賃を金百疋に致し借受け、不動の御首は門口に出し置き、日々鐘などたゝき、二十七日二十八日には助力を往来へすゝめ、日々なお所々を勧化せしが、いつとなく流行り出し、参詣も多くこれあり候処、右茗荷屋庄右衛門儀、踊り子



を集め、隠し売女いたし候儀につき、追放に相成り右屋敷もあき候ゆえ、すなわち庄左衛門元住居を打抜き、おい〳〵建て広げ、今は七間口ほどにて、一か年に初尾その外、千両金も納め候由。右近隣の大木口哲物語なり。

口哲若年の節、右の不動の御首を出し、海宝院勧化せし場所へ、子ども遊びに出で候由。かつ海宝院は元来常陸の者なりしが、その後在所の親病気にて恋い慕い候ゆえ、よんどころなく、右不動一式を本所弥勒寺落頭の者へ、金百五十両に譲り渡し、在所へ引込みけるゆえ、今は弥勒寺持ちにて、別当は妙王院といえるなり。」（東洋文庫本、六〇―六一頁）

大川ばた

涼み哉大川ばたはまゝ子立　琴風（蕉尾琴）

「ままこだて」は「碁石でする遊びの一種」で、『日本国語大辞典』に「黒白の石それぞれ一五個づつ、合計三〇個を、何らかの順序で円形に並べ、あらかじめ定められた場所にある石を起点として、一〇番目にあたる石を取り除き、順次一〇番目の石を取っていって、最後に一つ残った石を勝とするもの（中略）白・黒を、それぞれ先妻の子、後妻の子に見立ててあるところからこの名がある」と解説してある。この句、大川端をそぞろ歩く人の多いことからの着想と思う。

間部河岸（まなべ）

夕立や大名走る間部河岸　抱一

間部河岸は、両国橋・新大橋間の大川端の称である。大名の二男坊で画家として高名な、抱一上人の作であることが、この句をいっそう興あるものとする。

浜町朝市

朝市の蚊やすさまじき秋の空　漁光（鹿子）

浜　町

浜町や荻の夕ぐれ自身番　如蛙子

浜町や蚊の初音聞ひなの後　玄白

玄白は杉田氏である。句は、「いつさい日録」寛政元年三月十日の条に見える。玄白は当時、山伏井戸の近くに住んでいた。この句および「朝市」の句によって、浜町河岸に添った町々は、夏の夜ひどく蚊になやまされていたことが知れる。

私は、少年の日に、浅草蔵前に近い寿松院の墓地の空に、無数のヤンマが旋回しながら飛んでいたことを憶いだす。浜町川の上にも、ヤンマが流れるように、行ったり来たりしていたであろう。この辺りの旗本屋敷の子供達も、もち竿を持って、トンボ捕りに夢中になっていたであろうか、どうであろう。夕暮の巷には蚊遣りに焚く、ヨモギのかおりが流れ、あかね色の夕焼空を背景に、コウモリが、せわしなく身を翻していたことであろう。

月

夕月や柳の枝を空へ吹く　嵐雪

この句については、『玄峰集』（俳諧文庫第七篇所収）に、次のような注解が加えてある。

「此解、撮解にもあれど、もれたるをいへば、当時日本橋と両国橋との間の浜町に、里俗山伏井戸と云井在。其傍に幕府の臣にて星合伊織の屋敷の裏に雪中庵在し也。此所に古き柳在て庵の目じるしとなれり。人呼で嵐雪柳といひし由。此もとにての吟にて、夕月の夜なればこそ、空へ吹くの五文字はたらき在て、題に少しもうごかざるところ思ふべし。」

催し物のお知らせ

◇ 東京を語る会　第16回

日時　十二月六日（土曜日）午後二時～四時
場所　当館鑑賞室
演題　築地小田原町界隈
講師　俳優　加藤　武氏

今回は、舞台にテレビに活躍されている、俳優の加藤武さんを、お招きしました。

加藤さんは、昭和四年、築地小田原町のお生れで、想い出などをお話ししていただきます。